
raining

アコヤサクラ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

r a i n i n g

【Nコード】

N 5 2 6 4 L

【作者名】

アコヤサクラ

【あらすじ】

雨の、降り止まない絵本があった。

私はその中にいるのか。

lose my mind

初夏めいてきた。天気予報によれば、29度になるとかならないとか。

どおりで虫が多くなったわけで、名前の存じ上げない、羽根のついた虫に頬を蹴られた。

なんかそいつがそれで満足なら、まあ満足か否かはよくわからないが、それでいいんじゃないかと思っただし、ムカつきもしなかった。

もしかしたら、人に頬を打たれても、それ自体にあんまり興味はないというか、関与もしたくないというか、どうでもいいとしたか。

痛みは走るのかもしれないが、そういった諦念が痛みを軽減するよな気もした。

今日は快晴で、で、だから何なのかと言われても困ってしまうけれど、そう思ってみても、やっぱり空は晴れわたっていた。車種わからない車が、ちょっとせわしく通り過ぎる。

私は車に乗れない。維持費も払えないし、反射的注意力も散漫だ。

でもその件に関しては、一般人にカテゴライズしていただきたい私としては、あんまりどうでもよくない。

でも、精神病だからしょうがないよね、アハハとも言えまい。車の話題だの、免許の話題だのには、ちょっととした屈辱と狼狽の念を味わせていただく。どうもね。

なんかどうでもいいことばっかだけど、歩いてれば歩いてしまうわけ、進んで進んで駅も鼻の先になる。どこの中学生だかよくわからないが、夏服を身に纏った男子学生が、生気なさそうによたよたと歩を進める。すれ違って、振り向かない。多分、あのひとは私に興味があつて、ないのだろう。多分あの子は老婆とすれ違う時、あんな目はしない。どんな目って、ひどく疲れた目。でも、やはり人が二人いれば、違う視線が当てられると、それは必然だと思ってしまう私だった。

どうも駅のロータリーは、鈍行しか停まらなくても、往来が激しい。なぜかこの駅では、乗車前、お手洗いに行くのが習慣づけられた私は、一歩ごとに尿意が増してくるような、むずがゆさを覚える。はたしてトイレは照明が街灯のようだった。いつももつと、蛍光灯のような、健全さを醸し出している電球が、急に色気づいたみたいだった。バーの照明を想起させるような、そんな小洒落た電球さんだった。

用を済ませて、鏡の前に佇む。化粧が微妙だ。ファンデもろくにしなかったから、うん十年後にはどうなることやらと思ってみただけ、瞬きしたらなんかそこまで生きてる自信がたちどころになくなった。まあ概してそういう人間こそ、やれ還暦だ、喜寿だ、ととんとん拍子に結構行ったりもするとか言われるけど、23の私には、そこまで行けと言われたら、ぶるぶると身震いするしか為す術がないだろう。

人生のポーンラスステージと呼ばれる四年間の大学生活が幕を閉じ、味気ない日常に首の皮一枚で繋がっているような、ロープでぶらんぶらんのような。

体が揺れる。電車特有のゆらゆら。車窓から眺める景色も虚ろに白くなり、私はまた狼狽の笑み（なんかよろしくないことらしいが）というか、落胆ともとれる、それでいて焦燥がかつたふてきな笑みを漏らした。危うく声を立てて笑いそうになるが、別段おもしろいことがあったわけではないし、電車の中で独り笑ってはちよつとアレなので、口元をぎゅつと締めてみた。自覚はあった。今の笑みの理由も、体の感覚も。それはまるで体中の水という水が皮膚を浸透しながらかさを増して、この景色がベネチアみたいな水の街になるんだと、意味不明だけど、なんとなく感じてしまった。そんな思考を持つ私は、奇抜でありたいと希う反面、マジョリティーに属することを切に願っているように見えると、近しい方に言われていた。

今現在の私の髪は黒く短く、社会から疎外されたような瞳は少しかげり、精神を少し病んでいるのだった。

眼光が鈍い光を放ちながら、車窓から射し込んだり和らいだりする光と、手を取り合っては離してを一つ覚えみたいに繰り返している。

シソイド

一つ覚えといえ、同じ曲を何度も何度もリフレインさせる癖が私にはあった。

反芻癖。それは言語という言語、行動という行動におしみなく反映され、伴うのだった。

輪廻を想起した。分裂し、いがみあい、錯綜しながらまた、芽吹いていく。

「起点が分からない。」

そう思うのだ。

いつから始まってしまったのか不明な、手垢のついた命の連鎖。だって私の命そのものだって、分裂しかねない。

心臓から。指先から。つむじから。

針が刺し込まれ、また抜かれていく。逆流する、低温の液体。何色なのか？なんだか私にはそれはコバルトブルーに思える。

多分、人間は海から生まれたから。

分裂してしまった心の話でしょう。

はじめは目がイカれたんだと思った。フィルター。膜越しの、やわらかな世界。

あらゆるデモニーニツクな事象は柔和な笑みを帯び、ほんとうに微笑すら常時口元にたたえていた。

英文に目を落とせば、単語のスペルはあっちを向いたりこっちを向いたりして、パラグラフなんか今にもそれらを引き連れて、話しかけてきそうな勢いだった。

そして次は耳が異常を来たした。

人の声なんか、犬の声なんかも、まったくエコーがかっている。でも私がいるのは学内だったり、自宅だったり、路上だったり、山の中でない。それでも、もわんもわんと、スローモーションで再生される音たちは、なんだか神様の啓示みたいだった。

それからのことはあまり記憶にない。

でも、私が神様に見切られたのは、確かだった。

つまらなかった。味の無い、カレーライスとかみたいなの。

そこにちゃんとあるのだけれど、何も感じなくて。

何もなかった。

おもしろくない朝だった。あえて何かおもしろおかしいことを挙げるとしたら、雨が降っていて、光の貧しい世界の中、私の手も、眼も、纏っている衣類さえも、ふてくされて、水の街の中に押し沈められたようだった。

嫌なことといえば、朝食を食べなければならなくて吐きそうになったり（別に食べなくてもいいのだが）、絶対に通ると思っていたあのコンテストの一次選考に落とされたのを偶然ネットで見かけたり、祖母が漬けるらっきょうの臭いがくさいと父が機嫌を損ねたり、まあ枚挙にいとまがない状態だった。

「すべては朝がわるいのだと、わたしはおもつ。」
そんな考えも、せわしない日常の内に、煙草の火のように掻き消される。煙が悲しげに、かげろうのように漂う。漂って、空に還る。

私が精神を病んだことによるメリットデメリットを客観視すると、天秤は困ったように少しくらついて、考えあぐねている。「そんなの私にはわからない」と、「無茶を言うな」と。

物事にはいろんなアングルがあつて、概念も人それぞれだから、一概にそんなことを言えるはずもないのに、私はその答えを執拗に求めて、天秤を凝視した。

静寂。

天秤がそれを蹴り破るように、「私の出番が来るまでに」という。九月の暮れに、私は24になる。天秤に司られた、他者に平等で、正義感溢れる子にと育った。

結果がこういうことになる。私は間違っているのかあっているのか

わからないその啓示に対する承諾をするように、重い首を縦に振った。母親譲りで、肩にはいつも何かが生かっているように、そいつが苦しめるみたいに、重石か何か乗っているようだった。カウントダウンがはじまったのだった。

Long Long Ago

遙かかなた昔、自らが生まれ来ることを私は知り得たのだろうか。生まれ堕ちて、消えて、また生まれ堕ちるというのか。

その内には、おびただしい数の傷つけ、傷つけられた記憶と、拭えない涙の痕があった。

笑顔の数もあるのだろう。しかしそこに焦点は当てられず、アイロニカルな嘲笑を以てしか、光り得ないのだった。

そういえば、上履きの底のゴム地に、画鋲が刺さっていたことがあった。

画鋲はいつも、なぜか先端近く、一つぎりで刺さっているのだった。黙っているし、息もしない。でも死んではない。

奴は正しい画鋲の一員として、私の足の裏に潜み、誰かしらの罵倒の念を芸術のように表現しているのだった。

私もそういった使命があるのだと思っていた。

昔々、家族に愛されるために、そして出会う人々と愛し合うために、生まれ堕ちたのだと思っていた。

画鋲には画鋲の、洗濯機には洗濯機の、ポプリにはポプリの、雨には雨の役割があるように。

マテリアルの群れという群れが、世界を形作る。

形成された世界は、美しく悲しくって、広いようで狭い。

昔々の話だった。

私が生まれ堕ちるのが決められた瞬間も、朽ち果てる最期の瞬間も、決定づけられた事象が、再現されている、ただそれだけの drama

a
だ
っ
た。

Scatter Heart

そうこうしているうちに、飼っていた金魚が同時期に何匹も死んでいった。

なんだか世話を怠ったわけでもなく、それでもいわゆる寿命は過ぎていたので、

私は機械的にサルビアの花が植わった土が盛つてある部分を少しだけ掘り起こし、やはり機械的に葬儀を挙げてやった。

桜の木を思い出してしまった。唐突に、鮮明に。

桜の木の下には、死体が埋まっている、と私がつぶやいたことが確かあったと思う。

それを聞いていたそのときの彼氏は、私を真剣に侮蔑の念で見やっ

た。私はそれを、なんとも思わなかったけれど。

でも、自分がどのような形で葬られるかなんて、私には働きかけられないけど、私はそれに関与したくてたまらないのだった。

できれば雨の日に（そう水葬なんか乙だ！）、そつと、海に還るよ

うに、眼を閉じたいと思ったのだった。

でも誰もそんなことしてくれないのも熟知していた。

なんだか味気なくて、カレーライスはついに腐敗した。

だから私は。

r a i n i n g

いい加減、腐ったカレーライスをどうにか処分しなければならなかった。

処罰、投棄、存続。鞭を手にした私には、その皿ごと力手破るように、カレーの飛沫やら、お百姓様が必死こいて育てたであろう米粒のなれの果てを、顔に腕に浴びるのだった。

だいたい私の感性は常軌を逸している。だから蔑まれる。懐疑的な瞳は、蛇腹なわたしの尾っぽから額までメツタ刺しにしてくれる。

みんな生きて、みんな泣く。

それは分かっている。

でもいがみ合って、すれ違って、他人の涙の、ひとつぶの重さを私は知らない。

同様に、私の涙のひとつぶも、なんだか意味を成さないものに思える。

閃光。有無を言わさない強いしなやかな光が、私の瞳に入ってくる。私は無色透明の液体をぼろぼろと零した。頬骨を伝い、唇をかすめながら、歯に、舌に覆いかぶさって、あの味が（腐敗したカレーライスか。）を想起するような、しょっぱさに苛まれた。液体は食道を通り、臓器を突き破って心臓の心室の戸を叩き破る。空から、赤い雨が降る、降る、降る。少し透明で、マーブル模様みたいな雨粒が、いろんな形の、いろんな人間の、痛みという痛みが雨になって降っていた。

洗濯物をしまわなければと思った。

私は足早に、自宅に戻ろうとした。そうだ、家には誰もいなくて、

お気に入りのワンピースなんか、
明日着ようと思っていたのに、濡れては困る。あの白いワンピース
が、マーブルの赤色に染まったら困ってしまう。

玄関の鍵を乱暴に開けて、私は22段ある階段をドタドタと音を立
ててのぼった。

バッグをほおり投げ、窓の二重ロックをはずして、おもてに出る。

果たしてワンピースはまっしろだった。

他の衣類も慌てて取り込んだけれど、いただいたバラのハンカチも、
家族皆が使う洗面のタオルも、一滴として液体を含んでいないのだ
った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5264/>

raining

2010年10月12日05時32分発行